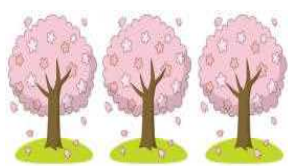


高取小だより

令和7年3月24日



# 三本桜

第40号

ふかく考える子    あたたかみのある子    がんばりのきく子  
3月の目標：学校生活のふり返りをしよう

## ありがとうございました

令和6年度は、真にコロナ禍明けの学校生活を1年間通して経験できた年度でした。今年度も保護者、地域の皆様、関係の皆様方のご理解ご協力の下、本日の修了式を迎えることができました。この場をお借りして心より感謝申し上げます。

19日（水）に、平成31年・令和元年度に入学した6年生の卒業式を行いました。振り返ってみれば、コロナ禍前の学校生活を辛うじて知る小学生は、卒業生である6年生84名が最後となります。



【令和6年度 卒業式】

6年生が当時1年生だった時に「平成」から「令和」への改元という貴重な経験をして、翌年開催予定だった“TOKYO2020 オリンピック・パラリンピック”に沸く日本の姿を1年生なりに肌で感じながら、「もうすぐ2年生！」と心踊る令和2年の年明けを迎えたはずでした。しかし、新型コロナウイルスの大流行によって、100年振りといわれるパンデミック（感染症の世界規模的大流行）となり、令和2年3月からは全国公立学校等の一斉休業というこれまた誰も経験したことのない日々を迎えることになりました。そして令和2年度入学児童として、その日を心待ちにしていた5年生は、厳戒態勢の下での入学式を経験しました。その後は、何とか全校児童が登校できたのが令和2年5月半ば過ぎ。こうして振り返ってみると、“記録”として書き留めておかなければ「むかしむかし、あったけど…」という感じで、遠い昔のあいまいな“記憶”になってしまいそうです。今を生きる子どもたちは、世界的なとてつもない大きなうねりの中で、大人たちとは全く違う子ども時代を実にたくましく生き抜いてきた子どもたちなのだ、と改めて考えられます。

在校生にとってこの3～4年間で経験すべきことで、できていないことがまだまだたくさんあるように思います。次年度の教育についても「不易と流行」「取捨選択」「優先順位」などを十分考慮しながら、子どもたちにとって必要な経験と身に付けるべき力を数年かかるとは思いますが、しっかりと獲得させていきたいものです。令和7年度子どもたちの好スタートに向けて、学校教職員一丸となって取り組んでまいりますので、今後とも保護者・地域の皆様、関係の皆様方のご理解ご協力を賜りますようお願いいたします。

## やってみせ、言って聞かせて、させてみせ、ほめてやらねば、人は動かじ

昨年に続き掲載します。第2次世界大戦中の連合艦隊司令長官だった、山本五十六元帥の言葉です。実際の軍隊の中は、こうではなかったと思われますが……。昭和初期の言葉なのに、古さをまったく感じさせず、教育のさまざまな場面で効果的な言葉です。給食の準備や清掃活動では特に意識しているつもりですが、なかなか実践できません。この言

葉には次の言葉が続きます。一つ達成しても、その次がまだあるのです。

話し合い、耳を傾け、承認し、任せてやらねば、人は育たず

さらに続きます。これだけのことをしないと、人は実らない！ 教育の難しさをかみしめる日々です。

やっている、姿を感謝で見守って、信頼せねば、人は実らず

## 子どもたちの夢

第一生命保険が全国の小学生を対象とした、「大人になったらなりたいもの」の集計結果を発表しました。その結果を以下に掲載します。

### 男子

- ①会社員
- ②ユーチューバー／動画投稿者
- ③野球選手
- ④サッカー選手
- ①ゲームクリエイター
- ⑥公務員
- ⑦警察官
- ⑧運転士／ドライバー
- ⑨ITエンジニア／プログラマー
- ⑩医師
- ⑩建築士

### 女子

- ①パティシエ
- ②会社員
- ③漫画家／イラストレーター
- ④医師
- ⑤歌手／アイドル
- ⑥看護師
- ⑦教師／教員
- ⑦美容師／ヘアメイクアーティスト
- ⑨公務員
- ⑩料理人／シェフ

各家庭におかれましては、この春休みにお子さんの将来について話し合ってくださいをお願いします。子どもたちの夢のサポートをする際には、やりがいと大変さの両方を伝えながら、「大変だけど夢の実現に向けてがんばっていこう」という気持ちを醸成してあげたいです。

## 始める

校庭の三本桜に一輪花が咲き、あっという間に開花、春の訪れを感じる頃です。身の回りでも新風を感じます。清々しいすてきな季節を迎えようとしています。

しかし、何となく重たい気分になるときもあります。「始まる」にあたって、「始めなければ」というストレスを感じることがあります。始めたくても、なかなか行動できない人もいるはずです。失敗したくない、恥ずかしい思いをしたくない、身構えてしまう人もいます。

明治から昭和にかけて活躍した俳人・高浜虚子は、著書『俳句の作りよう』の中で、俳句を作るときには、「何でもいいから十七字を並べてごらんさい」と説いています。それでも、俳句を作るために参考書や句集も読んでみたものの、どうもまだどうして作っただけなのか分からない人に対して、「どうでもいいからとにかく十七字を並べてごらんさい」と勧めています。

桜の花びらが散りながら、「いつやるの？ 今でしょ！」とにこやかに語っている季節、「うまくいなくても大丈夫、とにかく一歩を踏み出そう！」 自信なさそうにしている子どもたちに、すっと手を差しのべたり、そっと背中を押してあげたりする場面が出てきそうです。